

職業的地位とネットワーク特性

林 拓 也*

1. 本稿の目的
2. データと変数
3. ネットワーク・サイズ
4. インティメイト・ネットワーク
5. 結 語

要 約

本稿では、都市を構成する個人属性のひとつとして職業的地位に焦点を当て、個人の取り結ぶパーソナルネットワークにおいてどのような特性が現れるのかを検討する。その際に、職業的地位が多元的であることを念頭に置き、従業形態と威信地位という異なる側面からのアプローチを試みる。分析対象とするネットワーク変数は、ネットワーク・サイズとインティメイト・ネットワーク（最も親しい人）の属性である。まずネットワーク・サイズについて、従業形態は近隣ネットワーク量・習い事友人数（女性）に影響し、ともに自営・無職女性において発達していた。そして威信地位は近隣ネットワーク量・遠距離友人数・学校友人数に影響し、近隣は低地位において、後二者は高地位において発達していた。インティメイト・ネットワークの属性の中でも特に着目したのは職業的地位で、対象者本人のそれとの同類結合について分析を行った。それによると、従業形態・威信地位のどちらの側面から見た場合も、概ね自分と同類の相手と結びつく傾向が確認された。ただし、同類か否かを規定する外的要因に関しては、それぞれの従業形態や職種によって異なっている。

1. 本稿の目的

本稿では、個人の職業的地位に従業形態と威信地位という2つの側面から捉え、それらとパーソナルネットワークとの関連を扱う。

近年の都市社会学におけるネットワーク研究は、とりわけウェルマン（Wellman 1979）やフィッ

シャー（Fischer 1982）などの影響から、個人のネットワーク特性に対する都市度の効果あるいは都市間比較に焦点を当てることが多く（例えば、野辺 1991, 松本 1992, 大谷 1995）、そうした中で個人の職業的地位は都市とネットワークを媒介する要因のひとつとして位置づけられる。例えば野沢（1992）は、ウェルマンの提起したパーソナルコミュニティ類型を職業的地位という個人属性

*東京都立大学大学院社会科学研究科(博士課程)

から検討し、自営層・無職層が「コミュニティ存続」型、ホワイトカラー層が「コミュニティ解放」型であるという調査結果を得ている。そこでは「自営業主層対勤め人層、ホワイトカラー層対ブルーカラー層という職種と従業上の地位の組み合わせ」から、商工自営／ホワイトカラー／他の勤人／無職という職業分類が用いられ、そしてそれぞれの保有資源との関連から、先のようなコミュニティ類型が解釈されている。しかし、職種と従業上の地位は本来は職業的地位を構成する別個の要素であり、あるネットワーク特性が職種（あるいはそこに見出せる階層的な序列）という側面との関わりで解釈できるのか、それは従業上の地位との関連は見られないのか、といった部分が明確にはならない。このような職種と従業形態（従業上の地位）との組み合わせによる職業分類は、他の先行研究においても用いられており（松本 1994, 大谷 1995）、やはり同様の議論が当てはまることになる¹⁾。本稿では、職業的地位から見たネットワーク特性の析出に主眼を置きつつ、職業的地位を構成する従業形態と職種とを別個の要素として捉えた上で、分析を進めていく。それによって、従来そして今後のネットワーク研究における職業変数の扱いに対して、ひとつの視点を提供したいと考える。

分析対象とするネットワーク特性に関して、内容は大きく2つに分かれる。まず前半では、ネットワーク・サイズに焦点を当て、職業的地位による差異を明らかにする。そこでは単に付き合いのある人が何人いるかだけではなく、どの種類のネットワークに傾斜しているのかも視野に含めることによって、その志向性についても検討する。後半では、その中でもインティメイト・ネットワーク（Intimate Network「最も親しい人」）を取り上げ、その属性について本人の職業的地位との関連を分析する。とりわけ本稿で焦点とするのは、相手の職業的地位である。それが対象者本人の地位とどの程度の関連が見られるのかに関しては、選択的交際（differential association）や同類結合（homophily）の議論と深く関わるものである。選択的交際は、配偶者選択において見られるよう

な通婚圏と同様、一種の親交圏を形成するものであり（鹿又 1990）、それは人々の結びつきという観点から社会階層の実体 — どの階層間の結合が強いのか、あるいは断絶が深いのか — を把握する一助となる。またその中でも、自分と同じないし近い階層に位置する相手がより多く選択されるという同類結合は、社会階層間の流動性を低め、その断絶を深める可能性を持つ。この同類結合については、既にいくつかの研究成果が見られるが、それがいかなる要因によって生じているのかに関しては未知の部分が多い（Marsden 1988）。本稿においては、その要因まで視野に含めながら分析を進めていきたいと思う。

2. データと変数

2. 1 使用データおよび変数の設定

本稿で用いるデータは、1995年から1997年にかけて実施された「都市度とパーソナルネットワークに関する調査」によって得られたものである。対象サンプルは、文京区・調布市・福岡市中央区・福岡市西区・新潟市・富士市・松江市に居住している20歳以上75歳以下の男女である。

冒頭で述べたように、本稿では職業的地位を従業形態と威信地位という2つの側面から捉える²⁾。具体的な変数化に関しては、以下の通りである。まず従業形態は、職業との関わりを表し、その程度に応じて以下の4カテゴリーとした。

- [1] 自営業主・家族従業員・自由業・経営者・役員
- [2] フルタイム雇用者
- [3] パートタイム・臨時雇用者
- [4] 無職

この分類は、先行研究で用いられてきた従業形態を概ね反映させたものである。ただし、[1]の中で「自営業主・家族従業員」と「経営者・役員」は性格を異にするため、これらは別カテゴリーとして扱った方が良いのかもしれない。しかし、後者はケース数も少なく（N=40）、またその3/4以上が従業員規模300人未満で中小企業経営者の

色彩が濃いこともあってここに含めた。したがってこのカテゴリーは、個人の生活と職業とがかなりの程度オーバーラップしている形態として位置づけることができよう。その内部構成について、男性は「自営業主」57.6%「家族従業員」3.8%「自由業」11.4%「経営者・役員」27.3%、女性は「自営業主」24.3%「家族従業員」62.2%「自由業」8.1%「経営者・役員」5.4%である。なお、このカテゴリーを一括する場合は「自営」と呼ぶことにし、個別に言及する場合はそれぞれ「自営業主」「家族従業員」などとして区別する。

次に威信地位に関してであるが、それは有職者に関して地位の高低を表す指標である。それは1975年SSM調査（社会階層と社会移動全国調査）によって得られた職業威信スコアをもとに、本調査における10カテゴリーの職種に対してそれぞれの平均値を以下のように付与した³⁾。

[1] 農林漁業	33.8
[2] 事務職	45.7
[3] 販売職	40.0
[4] サービス職	36.2
[5] 保安職	43.3
[6] 生産工程従事者	36.9
[7] 専門職Ⅰ	79.3
[8] 専門職Ⅱ	58.4
[9] 専門職Ⅲ	61.2
[10] 管理職	68.0

ネットワーク変数について、その詳細は個々の分析の中でその都度説明していくことにする。概略だけ紹介しておく、前半のネットワーク・サイズに関する分析では、「友人」と「日頃から親しくしている人」をいくつかの種類に分け、それぞれ何人挙げているかに焦点を当てる。後半のインティメイト・ネットワークに関する分析では、「最も親しい人」を対象として、その属性および交際内容についての分析を行うことにする。

2. 2 職業的地位と基本属性

ネットワークの分析に入る前に、職業的地位と基本属性との関連を確認しておこう（表1）。その概略は以下のようにまとめられる。

- (1) 従業形態＝自営・経営者；
年齢はやや高い。持家率・世帯収入はいずれも最も高く、階層的には上位に位置する。ただし、学歴については、女性において低く現れている。定住性が高いことが、地域移動・居住年数からわかる。通勤時間は最も短く、職住が近接している。
- (2) 従業形態＝フルタイム；
年齢は最も低い。学歴は最も高く、持家率は最も低く、収入は中位という具合に階層的地位は非一貫的である。若年層が多いためか、居住年数は短い。通勤時間は最も長く、その行動半径の広さが垣間見られる。
- (3) 従業形態＝パート；
男性は高齢層が多く、中年層に少ないのが特徴である。女性は、逆に中年層に多く、高齢層に少ない。階層的に、学歴は中位であるが、持家率・収入では低位に位置する。
- (4) 従業形態＝無職；
男性はパートと同様、高齢層に最も多い。女性においては年齢による大きな偏りがなく、これには専業主婦が多く含まれていると思われる。階層的には、男性においては学歴・収入が最も低く、女性においては中位である。ただし、持家率は自営に次いで高い。居住年数も長い。
- (5) 威信地位
男性は高年齢ほど、女性は逆に低年齢ほど高いスコアを示す。階層変数のうち学歴・収入とは相関が見られるが、持家率のおける差はない。また男性においては、地域移動者の地位が高いのが特徴である。通勤時間との関連については、高地位ほど遠距離であることがわかる。

3. ネットワーク・サイズ

3. 1 種類別ネットワーク・サイズ

表2は、従業形態毎の各ネットワーク・サイズの平均値、および職業威信スコアと各ネットワーク・サイズとの相関係数（ r ）を男女別に示したものである。「友人」とは、友人総数のことを指

表1 従業形態および威信地位と基本属性

(男性)						(女性)					
	自営	フル	パート	無職	(威信)		自営	フル	パート	無職	(威信)
年齢											
1. 20-39歳	8.3%	34.7%	32.1%	21.0%	(47.20)		12.2%	44.8%	27.7%	25.0%	(46.20)
2. 40-59歳	59.8%	58.8%	7.1%	4.8%	(50.31)		62.2%	53.6%	63.4%	35.0%	(43.86)
3. 60歳-	31.8%	6.5%	60.7%	74.2%	(52.29)		25.7%	1.6%	8.9%	40.0%	(43.19)
学歴											
1. 初等	14.7%	13.5%	25.0%	27.4%	(41.19)		28.4%	8.8%	13.4%	19.2%	(39.15)
2. 中等	43.4%	34.4%	39.3%	37.1%	(44.55)		51.4%	56.8%	60.7%	51.6%	(43.13)
3. 高等	41.9%	52.1%	35.7%	35.5%	(57.10)		20.3%	34.4%	25.9%	29.2%	(50.22)
地域移動											
1. 非移動	49.2%	45.1%	53.6%	46.8%	(46.08)		54.1%	45.5%	38.7%	38.8%	(43.54)
2. 近距離流入	25.4%	27.0%	25.0%	30.6%	(53.33)		25.7%	34.1%	32.4%	35.6%	(45.12)
3. 遠距離流入	25.4%	27.9%	21.4%	22.6%	(53.12)		20.3%	20.3%	28.8%	25.6%	(46.07)
居住年数											
1. 5年未満	15.2%	33.2%	25.9%	18.0%	(51.93)		14.3%	29.5%	23.4%	26.7%	(46.39)
2. 20年未満	34.8%	32.2%	29.6%	27.9%	(50.61)		37.1%	43.4%	44.1%	26.3%	(44.50)
3. 20年以上	50.0%	34.6%	44.4%	54.1%	(48.07)		48.6%	27.0%	32.4%	47.0%	(43.51)
住居形態											
1. 持ち家	74.2%	61.1%	63.0%	72.1%	(49.08)		81.4%	60.7%	65.5%	75.1%	(44.29)
2. その他	25.8%	38.9%	37.0%	27.9%	(50.40)		18.6%	39.3%	34.5%	24.9%	(44.77)
世帯収入											
1. 500万未満	23.5%	24.6%	55.6%	68.9%	(44.03)		26.0%	29.3%	40.2%	40.8%	(42.51)
2. 900万未満	37.9%	48.8%	29.6%	24.6%	(47.97)		31.5%	37.4%	38.4%	37.9%	(43.93)
3. 900万以上	38.6%	26.5%	14.8%	6.6%	(58.27)		42.5%	33.3%	21.4%	21.3%	(47.04)
通勤時間											
1. 10分以内	58.7%	24.2%	33.3%	----	(46.95)		69.0%	28.2%	36.9%	----	(42.80)
2. 30分以内	24.0%	39.5%	48.1%	----	(48.95)		18.3%	45.2%	45.9%	----	(45.38)
3. 31分以上	17.4%	36.3%	18.5%	----	(55.51)		12.7%	26.6%	17.1%	----	(46.94)

注) 従業形態とクロス表については縦計 100%。威信については各カテゴリーの平均値。

学歴；初等＝旧制小学校、新制中学、

中等＝旧制中学校、新制高校、

高等＝旧制高校以上、新制短大・高専以上。

地域移動；非移動＝出身地(15歳時の居住地)が現住市区と同一、

近距離流入＝出身地が現住地の隣県以内、

遠距離流入＝それ以外。

住居形態；持ち家＝一戸建て持ち家、分譲マンション。

表2 職業的地位とネットワーク・サイズとの関連

(男性)						(女性)					
平均値	N	友人	親戚	職場	近隣	N	友人	親戚	職場	近隣	
自営	129	7.30	3.74	8.12	6.24	71	7.21	3.75	5.51	7.15	
フル	211	6.31	3.23	7.31	4.62	123	6.53	2.76	5.85	4.05	
パート	28	5.82	3.86	6.29	5.32	109	6.85	2.98	5.16	5.26	
無職	57	5.74	3.60	2.82	5.30	207	7.76	3.44	2.08	5.86	
F検定		ns	ns	**	*		ns	ns	**	**	

相関係数	N	友人	親戚	職場	近隣	N	友人	親戚	職場	近隣
威信	379	.034	-.031	.014	-.190	312	.102	-.011	.027	-.196
		ns	ns	ns	**		ns	ns	ns	**

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, ns $p > .05$ 。

平均値は実数。ただし、分布に偏りが見られるので、検定は対数変換後の数値による。

す。「親戚」は、日頃から親しくしている親戚である。「職場」は、職場・仕事関係の友人数と、それ以外の親しくしている職場・仕事関係の人数を足し合わせた職場ネットワーク全体を指す。「近隣」は、友人の中で近所に住んでいる人すなわち近距離友人数と、それ以外の日頃から親しくしている近所の人数を足し合わせた、近隣ネットワーク全体を指す⁴⁾。

分析結果は、男女ではほぼ共通している。友人数および親戚数については、従業形態・威信地位とも関連が見られなかった。職場ネットワークは、従業形態において有意差が確認されたが、Scheffé検定を用いた多重比較によると、これは無職と他三者との差によるものであり、有職の三類型間の差は有意ではなかった。つまり、職場ネットワーク量は現在の職場の有無に帰着することが示唆される。一方、威信地位と職場ネットワーク量との相関は有意でなかった。近隣ネットワークとは、従業形態・威信地位とも有意な関連が見られた。従業形態との関連は、多重比較によると、男性では自営とフルタイムとの差、女性では自営・無職とフルタイムとの差による。威信地位との関連は、男女とも低地位の者がそれを発達させていることを示す。ただし、これらの傾向は必ずしも職業的地位との関連だけではない。両者の関連の間には、他の要因が介在している可能性があり、それによる疑似関連にも配慮する必要がある。そのような媒介要因をコントロールすることによって、職業的地位とネットワークとの純粋な関連を析出することができるであろうし、あるいはそれをコントロールすることで両者の関連が消えるのなら、その媒介要因こそがキー変数であるということができるのである。近隣ネットワーク量について言えば、これは他にも現住都市・居住歴などとも関連していたので、職業的地位との関連は実際はそれら媒介変数による疑似関連であるかもしれない。そのことを確認するために、近隣ネットワーク量(対数値)を従属変数とし、それぞれの職業的地位および現住都市・地域移動・居住年数を独立変数とした共分散分析を行った。その結果、先に現れた職業的地位と近隣ネットワー

クとの関連は、現住都市・地域移動・居住年数をコントロールした上でも、さらに従業形態と威信地位を相互にコントロールした上でもやはり有意であった⁵⁾。

このように自営(特に自営業主・家族従業員)⁶⁾や女性無職(専業主婦が多いと思われる)が豊富な近隣関係を示すのは、彼らがその生活時間の大半を居住地近辺で費やしていることが一因となっていると考えられる。また、自営業はその職業の性質上、近隣が職業的基盤そのものになっていることもその要因として挙げられよう。そして、威信地位との関連については、近隣ネットワークが地位の低い者にとって重要な関係資源であることが示唆される。この点については、アクセルロッドの調査結果から鈴木が指摘した点でもある(Axelrod 1956=鈴木広訳 1965)。

3. 2 友人数の内訳

友人の総数については、職業的地位との関連は見られなかったが、さらにその内訳を見るといくつかの関連が確認される。本調査においてはどのような友人が何人いるかを尋ねているが、その第一の側面は距離である。質問における「近所に住んでいる友人」を近距離友人、「片道1時間以上かかる所に住んでいる友人」を遠距離友人とし、それ以外の友人、すなわち近所ではないが片道1時間未満の友人を中距離友人とした。

表3によると、まず近距離友人数について、従業形態が自営・無職(女性)の者、また威信地位の低い者に多いという傾向が見られ、先の近隣ネットワークと同様である。中距離友人数については従業形態・威信地位とも有意な関連は見出せなかった。遠距離友人数については、男女とも威信地位との相関が有意であり、それは現住都市・地域移動・居住年数をコントロールした上でも同様であった⁷⁾。

先の近隣ネットワークと併せて考えると、居住地近辺にネットワークを有する「コミュニティ存続型」は、従業形態が自営・女性無職、あるいは威信地位の低い者が当てはまる。これに対して、広域にわたってネットワークを有する「コミュニ

表3 職業的地位と距離別友人数

(男性)					(女性)				
平均値	N	近距離	中距離	遠距離	平均値	N	近距離	中距離	遠距離
自営	132	2.57	2.62	2.05	自営	74	3.14	2.30	1.72
フル	216	1.96	2.14	2.31	フル	125	1.79	2.78	1.90
パート	28	2.43	1.96	1.43	パート	112	2.24	1.96	2.54
無職	60	2.23	1.82	1.57	無職	220	2.69	2.93	2.36
F検定		ns	ns	ns	F検定		*	ns	ns

相関係数	N	近距離	中距離	遠距離	相関係数	N	近距離	中距離	遠距離
威信	387	-.139	.013	.181	威信	321	-.118	.067	.255
		**	ns	**			*	ns	**

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, ns $p > .05$.

平均値は実数。ただし、分布に偏りが見られるので、検定は対数変換後の数値による。

表4 職業的地位とタイプ別友人数

(男性)						(女性)					
平均値	N	職場	学校	子供	習い事	平均値	N	職場	学校	子供	習い事
自営	132	2.61	2.63	0.41	1.42	自営	74	1.50	1.70	1.16	2.15
フル	216	2.23	2.59	0.32	1.20	フル	125	1.91	2.38	0.58	1.14
パート	28	1.96	2.39	0.21	1.14	パート	112	1.40	2.18	1.42	0.97
無職	60	1.08	2.55	0.08	1.33	無職	220	0.68	2.60	1.20	2.69
F検定		**	ns	ns	ns	F検定		**	ns	**	**

相関係数	N	職場	学校	子供	習い事	相関係数	N	職場	学校	子供	習い事
威信	387	.042	.146	-.070	.002	威信	321	.013	.336	-.084	.033
		ns	**	ns	ns			ns	**	ns	ns

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, ns $p > .05$.

平均値は実数。ただし、分布に偏りが見られるので、検定は対数変換後の数値による。

「ティ解放型」は、威信地位の高い者に見られる。これらの特性は、それぞれの行動範囲の違いからも説明されよう。表1に戻って地位別の通勤時間を見ると、「存続型」を示す自営・低地位は職場までの時間距離が短いのにに対して、「解放型」の高地位は時間距離が長いことが確認される。むしろ、通勤時間は個人の行動範囲の一側面に過ぎないが、今後の研究においてはこのような側面にも留意する必要があるだろう。

友人種類の第二の側面は、関係形成の社会的文脈である。ここでは簡略化して「友人タイプ」と呼ぶことにしよう。それは職場・仕事関係の友人／学校時代の友人／子供を通じての友人／習い事・サークル・団体活動を通じての友人という4タイプの友人に分かれる。表4を見ていこう。職場友人数は従業形態との関連が有意であるが、先の職場ネットワーク量と同様、それは無職者と有職者との差のみであることが多重比較によって確認さ

れた。学校友人数は、威信地位との相関が見られ、これは学歴・地域移動・年齢をコントロールした上でも同様であった⁸⁾。ただし、男性の場合はコントロール変数として投入した学歴の方がむしろ高い関連であり ($\beta = .204$)、威信地位 ($\beta = .117$) よりも大きく寄与していることを示す。これに対し女性の場合は、学歴との関連は $\beta = .187$ であり、威信地位の方が大きな寄与を示していた ($\beta = .226$)。このような性差については説明が困難であるが、ただ交友関係を維持するのに学卒後のキャリア (職業達成) も影響している点は興味深い。場合によっては、その交友がキャリア形成に寄与している可能性も考えられる。ここでの分析では、両変数の共変関係の確認に留まるが、この点についてはさらなる検討が望まれよう。子供を通じての友人数は、女性における従業形態においてのみ有意差が見られる。多重比較によると、パート・無職とフルタイムとの差が有意であった

が、これはフルタイムに若年層が多いことから（→表1）、子供の有無に起因することが考えられる。このことは、子供を有する女性のみを対象として子供友人数を比較すると、その有意差が消失していることから裏付けることができた。最後に、習い事を通じての友人数は、やはり女性の従業形態においてのみ有意であった。そして、この傾向は学歴・居住年数・年齢をコントロールした上でも同様であり、自営・無職層において多かった。これらの層は、先にも検証したように、近隣ネットワークが発達していることから、習い事友人がそれと重なっているとも考えられる。データからは直接検討することはできないが、女性の場合は、習い事を通じて居住地近辺の、つまり「コミュニティ存続型」のネットワークを維持していると推

察される。

4. インティメイト・ネットワーク

4. 1 相手の属性と付き合いの程度

ここでは、個人の職業的地位によって親しく付き合う人の属性がどのように異なっているのか、そしてどのような付き合いをしているのかといった、ネットワークの質的側面を概観する。表5は、インティメイト・ネットワーク（最も親しくしている人）の属性および付き合いの程度と、対象者本人の従業形態および威信地位との関連を見たものである。

まず年齢について、従業形態においてはフルタ

表5 インティメイト・ネットワークの属性と付き合いの程度

(男性)						(女性)					
	自営	フル	パート	無職	(威信)		自営	フル	パート	無職	(威信)
年齢	**				*		**				*
1. 20-39歳	12.7%	37.9%	36.0%	26.3%	(47.75)		8.3%	43.7%	25.9%	23.1%	(46.52)
2. 40-59歳	57.9%	53.9%	8.0%	17.5%	(50.42)		58.3%	47.9%	63.0%	36.3%	(44.17)
3. 60歳-	29.4%	8.3%	56.0%	56.1%	(53.20)		33.3%	8.4%	11.1%	40.6%	(42.20)
年齢差	4.27	3.46	2.72	4.70			4.88	4.01	3.54	3.66	
学歴	*				**		ns				**
1. 初等	12.2%	9.4%	26.1%	24.1%	(44.03)		15.7%	9.3%	14.3%	14.4%	(39.84)
2. 中等	43.1%	40.4%	30.4%	29.6%	(46.41)		52.9%	50.8%	61.0%	51.9%	(43.33)
3. 高等	44.7%	50.2%	43.5%	46.3%	(55.28)		31.4%	39.8%	24.8%	33.7%	(48.69)
学歴差	1.70	1.18	0.83	1.35			1.69	1.24	0.93	1.38	
地域移動	ns				**		**				ns
1. 非移動者	49.2%	47.5%	45.8%	44.4%	(46.08)		55.1%	37.6%	50.9%	35.9%	(43.54)
2. 流入者	50.8%	52.5%	54.2%	55.6%	(53.22)		44.9%	62.4%	49.1%	64.1%	(45.51)
時間距離	ns				**		ns				**
1. 10分以内	32.5%	28.2%	32.0%	36.8%	(45.65)		40.3%	29.4%	32.7%	34.1%	(42.77)
2. 30分以内	27.0%	31.1%	28.0%	26.3%	(49.43)		27.8%	36.1%	33.6%	26.1%	(43.46)
3. 31分以上	40.5%	40.8%	40.0%	36.8%	(54.14)		31.9%	34.5%	33.6%	39.8%	(47.55)
接触頻度	ns				**		ns				ns
1. 週1回以上	36.8%	36.6%	56.0%	37.5%	(47.22)		43.5%	40.8%	38.9%	38.7%	(44.19)
2. 月1回以上	36.0%	29.3%	24.0%	30.4%	(50.22)		27.5%	33.3%	27.8%	29.7%	(44.41)
3. 月1回未満	27.2%	34.1%	20.0%	32.1%	(54.04)		29.0%	25.8%	33.3%	31.6%	(45.50)
電話頻度	ns				*		ns				ns
1. 週1回以上	32.5%	29.4%	29.2%	27.3%	(47.02)		37.1%	46.7%	36.8%	44.8%	(44.63)
2. 月1回以上	31.7%	23.5%	29.2%	30.9%	(51.72)		30.0%	30.8%	34.9%	31.0%	(44.84)
3. 月1回未満	35.8%	47.1%	41.7%	41.8%	(51.95)		32.9%	22.5%	28.3%	24.3%	(44.12)

注) 従業形態は縦計100%。威信スコアについては各カテゴリーの平均値。

** $p < .01$, * $p < .05$, ns $p > .05$ 。従業形態についてはカイ自乗検定、威信についてはF検定による。

年齢差；(相手の年齢-本人の年齢)の絶対値。

学歴差；(相手の教育年数-本人の教育年数)の絶対値。

地域移動；非移動者=主な生育地が現住地と同一市区、

流入者=主な生育地が現住地と異なる市区。

イムが低年齢、自営・無職が高年齢の相手と結びつく。威信地位においては男女で逆の傾向を示し、高地位の男性は高年齢の相手と、高地位の女性は低年齢の相手と結びつく。ただし、対象者と相手との年齢差が5年以下であるという結果からも、これはむしろ両者の年齢における同類傾向が現れたものと考えられる。学歴については、男性フルタイムあるいは威信地位が高い者が高学歴の相手と結びついている。ただし、両者の学歴差から、これも学歴における同類傾向が現れたものかもしれない。地域移動に関して、男性においては威信地位の高い者が、女性においては無職・フルタイムが流入者と結びついていた。時間距離については、威信地位との関連のみであり、高地位ほど遠距離の相手と結びついている傾向を示す。接触頻度については男性の威信地位との関連のみで、高地位ほど相手との頻度が少ない。これは相手との時間距離が長いことに起因するものと思われる。電話頻度もまた、男性において威信地位が高いほど少なかった。

4. 2 職業的同類結合

個人の職業的地位と関連するインティメイト・ネットワークの属性の中でも、特に重要であると思われるのが、その相手の職業的地位である。両者の地位の結びつきがしばしば「同類結合」という文脈で議論されるのは、それが人々の行動面から階層間の結合／断絶といった実体を把握しなおすという点で、世代間階層移動や配偶者選択などとならび重要な意義を持つためである。

ここでの分析においても、個人の職業的地位を従業形態と威信地位の両側面から捉え、それぞれにおいてどの程度 of 同類傾向が見られるのか、さ

らにはそれを規定する外的要因について検討する。なお、同類か否かという判断基準に関しては、社会的距離 (social distance) を社会的位置の異同によりアприオリに設定する方法 (= 外的基準) と、分析から導き出される結びつきの強弱によって事後的に解釈する方法 (= 内的基準) とがあるが (鹿又 1990)、本稿では前者の方法に依拠することを断っておこう。したがって、従業形態の場合は両者が同じカテゴリーであれば同類とみなし、威信の場合は両者のスコアの差が小さいほど同類的であるとみなすことにする⁹⁾。

(1) 従業形態における同類結合

まず対象者本人の従業形態と相手のそれとのクロス表を表6に掲載した。すべての従業形態において、最も高い比率を示すのが自分と同じ従業形態であり、男性全体で58.6%、女性全体で51.3%がこのような同類結合を示す。中でも、男性では自営についてフルタイム、女性では無職における同類傾向が顕著であった。

しかし、これは各カテゴリーの大きさによるものとも考えうる。例えば男性においてパートの同類結合が小さく現れるのは、パートタイムの構成比率が小さく、最も親しい相手として同じ従業形態の者を見つけづらいためであるとも考えられるのである。そこで、その影響を除去した上で同類結合の強弱を比較するためにオッズ比 (odds ratio) を用いる。それは、特定の従業形態の者との結びつきにおける、異なる形態のケース数に対する同じ形態のケース数の比で、 2×2 クロス表から $(f_{11}/f_{12}) / (f_{21}/f_{22}) = f_{11}f_{22}/f_{12}f_{21}$ によって求められる (Verbrugge 1977)。したがって、例えば自営の同類結合オッズ比は、自営/その他の

表6 本人の従業形態 (行) × 相手の従業形態 (列)

(男性)						(女性)					
	自営	フル	パート	無職	(N)		自営	フル	パート	無職	(N)
自営	63.9%	22.1%	0.8%	13.1%	(122)	自営	40.0%	11.4%	8.6%	40.0%	(70)
フル	27.6%	60.7%	5.6%	6.1%	(196)	フル	15.7%	47.8%	13.0%	23.5%	(115)
パート	38.1%	9.5%	42.9%	9.5%	(21)	パート	15.9%	15.0%	40.2%	29.0%	(107)
無職	32.7%	19.2%	3.8%	44.2%	(52)	無職	14.4%	10.0%	12.9%	62.7%	(209)

注) 横計を100%とした。

従業形態という2カテゴリーからなるクロス表によって算出され、その値は他の形態と自営との結びつきに対して、自営同士の結びつきが何倍強いかを表すのである。こうして求められた各従業形態におけるオッズ比を列挙していくと、男性は自営4.26／フルタイム6.18／パートタイム19.07／無職8.17、女性は自営3.75／フルタイム6.95／パートタイム4.84／無職4.02であった¹⁰⁾。男性自営や女性無職といった、先の表6では強い同類結合を示していた従業形態が相対的に小さい値であり、このことは逆に言えば、同類結合がその集団(カテゴリー)の大きさにも依存していることを示すものである。

さて、このような同類結合はいかなる要因によって生じるのであろうか。次の分析では、従来あまり論じられてこなかった、同類結合の規定要因について検討する。まずは対象者本人の学歴・年齢・地域移動・現住都市などの属性変数と同類結合可否かとの関連を確認していくと、年齢および職場関係(その相手が職場・仕事関係であるか否か)が有意な関連を示した¹¹⁾。ただし、これらの変数の影響が、すべての従業形態において共通しているとは限らない。そこで次に、従業形態別に年齢・職場関係との関連を確認した。

表7は、本人の従業形態別に、同類結合可否かを従属変数とし、年齢と職場関係を独立変数としたロジスティック回帰分析の結果である。例えば、対象者本人が男性自営においては職場関係のみが有意な関連を示し、それは相手との関係が職場で形成された場合、そうでない場合よりも同類である確率が2.5倍[$=\exp(.93)$]である。このよう

に表7を追っていくと、まず年齢に関しては男性フルタイムと女性無職において同類結合と関連していた。両者の関連の向きは逆であり、前者が加齢とともに多様な相手と結びつくのに対し、後者は同類(＝無職)の相手と結びつくという対照的な傾向を示すものである。職場関係に関しては男性自営・フルタイム(10%水準であるが)・女性フルタイム・無職において同類結合と関連していた。有職である前三者においては、職場関係が同類結合を促進しているのに対し、女性無職においては職場関係が逆にそれを妨げている。無職女性の場合、「職場・仕事関係」が自分のかつての職場なのか、あるいは相手の仕事との関係なのかは明らかではないが、それが有職者、すなわち異なる形態の相手との接点として意味を持つのである。

(2) 威信地位における同類結合

まず、威信地位における対象者本人とインティメイト・ネットワークとの関連を相関係数で表すと、男性 $r=.398$ ・女性 $r=.433$ であった¹²⁾。しかし、それは必ずしも両者の地位が同程度であることを保証しない。例えば、相手とのスコアに差があり、かつその差がすべての対象者において一定であるなら、やはり高い相関を示すであろう。したがって、同類結合を検討するには、むしろ相手との威信スコアの差によって表すのが妥当であると思われる。そこで、相手の威信から対象者本人の威信を差し引いた数値を用いて、その分布を確認してみる(表8)。

全体的に見ると、自分とまったく同じ威信地位、つまり同じ職種である相手と結びついている比率

表7 ロジスティック回帰分析(従属変数=相手が同じ従業形態(1)/異なる(0))
(男性)

(N)	自営 (122)	フル (196)	パート (21)	無職 (52)
-2LL(0)	159.5	262.6	28.7	71.4
Model Chi	5.5 (*)	17.3 **	1.2 ns	0.7 ns
	b	b	b	b
年齢	-0.01 ns	-0.05 **	-0.02 ns	-0.01 ns
職場関係	0.93 *	0.68 (*)	0.63 ns	0.38 ns
Constant	1.04	2.57	0.69	0.27

(女性)

自営 (70)	フル (115)	パート (107)	無職 (209)
94.2	159.2	144.2	276.2
0.9 ns	9.6 **	2.2 ns	18.5 **
b	b	b	B
0.01 ns	-0.02 ns	0.00 ns	0.03 **
0.55 ns	1.19 **	0.65 ns	-1.65 **
-1.13	0.17	-0.55	-1.05

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, (*) $p < .10$, ns $p > .10$

「職場関係」はダミー変数で、職場・仕事関係=1/それ以外=0とした。

表8 相手との威信差の分布(全体と本人職種別)

(男性)									(女性)								
威信差	20+	10+	1+	0	1-	10-	20-	(N)	20+	10+	1+	0	1-	10-	20-	(N)	
全体	11%	3%	12%	40%	17%	3%	14%	(328)	7%	8%	16%	39%	22%	5%	3%	(219)	
農業	--	--	29%	71%	--	--	--	(7)	--	33%	33%	33%	--	--	--	(6)	
サービス	18%	--	38%	44%	--	--	--	(34)	10%	--	41%	46%	2%	--	--	(41)	
生産工程	16%	--	24%	40%	19%	--	--	(62)	16%	--	24%	44%	16%	--	--	(25)	
販売	26%	2%	12%	21%	38%	--	--	(42)	9%	6%	22%	22%	41%	--	--	(32)	
保安	14%	14%	14%	14%	43%	--	--	(7)	--	--	--	--	--	--	--	(0)	
事務	14%	18%	--	35%	31%	2%	--	(51)	7%	17%	--	34%	41%	1%	--	(76)	
専門a	--	--	6%	50%	--	28%	16%	(32)	--	--	7%	47%	--	30%	17%	(30)	
管理	--	--	1%	40%	10%	--	49%	(78)	--	--	--	67%	--	--	33%	(6)	
専門b	--	--	--	67%	7%	--	27%	(15)	--	--	--	67%	--	33%	--	(3)	

注) カテゴリーは、それぞれ20ポイント・10ポイント・0ポイントを区分点として、相手が自分より上回る場合には+・下回る場合には-の符号で表した。

横計100%。--はケース数が0であることを示す。

職種は威信の低い順に並べた。「専門b」は医学部・大学院修了者、「専門a」はそれ以外の学歴。

が最も高く、男性で40%・女性で39%に達する。異なる職種に関しては、女性では威信差が大きくなるほど最も親しい人として挙げる確率が低くなるのに対し、男性では20ポイント以上の威信差のところで再びその確率が大きくなっている。つまり、男性においては外的基準(この場合は威信地位)による距離が、必ずしも交際を制約しない場合もあることが示唆される。さらに、対象者本人の職種別に威信差の分布を見ると、同類結合におけるいくつかのパターンが確認される。まず威信の低いサービス・生産工程は同職率は中位もしくはやや高めであり、異なる職種の場合も自分と近い距離の相手と結びつく。威信のランクにおいて中位に位置する販売・事務は同職率が低く、異なる職種との結合率の方が高いこともある。その場合も、必ずしも距離の近い相手とは限らない。威信が高い専門・管理は互いに異なる傾向を示す。専門(a, b)は最も同職率が高いが、異なる職種の場合は距離の遠い相手とも結びつく。管理(男性)は同職率は中位に位置するが、威信スコアが20ポイント以上下回る相手との結合率が最も高い。

これと関連した議論を展開しているラウマンは、人々は自分の地位に近い相手と交際するという「自己類似仮説」(like-me hypothesis)と、本人の地位の高低にかかわらず、高地位の相手との交際を希望するという「威信仮説」(prestige hypothesis)を提示しており、主観レベルでは後者が、現実の行動レベルでは前者が当てはまること

を示唆している(Laumann 1966)。本調査は行動レベルからの把握であり、全般的には「自己類似仮説」が妥当するが、いくつかの職種はこの仮説に適合しない。そこには何らかの攪乱要因が存在するのか、そしてそもそも同類結合が生じる外的要因は何であるのかを次に検討する。

まずは従業形態の場合と同様、相手との関係が職場や仕事によって形成されたか否かが挙げられる。男性においては、職場関係の相手が同職である率は55.8%であるのに対し、そうでない相手との同職率は32.1% ($p < .01$)、女性においては前者が49.4%に対し、後者は33.6%であった($p < .05$)。表9は、職種別に職場関係と相手との威信差との関連を見たものである。なお、従属変数である威信差はプラス・マイナスで相殺されることを回避するため、その絶対値を用いた。

職場関係が否かによって相手との威信差が異なるのは、男性のサービス・生産工程と専門であっ

表9 本人職種別、職場関係と威信差(絶対値)

	(男性)		(女性)	
	職場	それ以外	職場	それ以外
サ・生	1.99	7.78 **	5.27	6.43 ns
事・販	8.81	9.17 ns	6.91	7.27 ns
管理	14.20	15.31 ns	----	----
専門	3.99	12.64 **	7.20	9.83 ns

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, ns $p > .05$ (t検定)

「サ・生」; サービス・生産工程。

「事・販」; 事務・販売。

なお、「農業」「保安」および女性の「管理」はNが小さいので省略。

た。いずれも職場関係が相手との威信差を小さくし、同類結合を促進していることを示す。これに対し、事務・販売や管理は職場関係の相手であっても同類的にはなっていない。この相違については、職場における階層的な多様性も関係していると思われる。とりわけ管理が事務・販売にとつての到達階層であるという意味でも、両者の関係は密接なものであるから、そこに威信差を超えた関係が形成されるのかもしれない。なお、女性の場合はどの職種においても職場関係と同類結合との関連は有意でなかった。

表10 重回帰分析結果

従属変数＝相手との威信差（絶対値）
男性・管理（N=77）

	r	b (β)
教育年数	-0.342 **	-1.554 (-.274) *
都市指標	-0.377 **	-0.078 (-.285) **
地域移動	-0.250 *	-5.267 (-.178) (*)
(Constant)		45.426
R Squared		0.246 **

注) r ; 単相関係数、

b ; 偏回帰係数、β ; 標準化回帰係数

** p<.01, * p<.05, (*) p<.10

他の属性要因の中で、同類結合との関連が見られたのは、男性管理における学歴・現住都市・地域移動であった。表10は重回帰分析によって、これらの変数を相互にコントロールした結果である。5%水準で有意であったのは学歴と都市指標で、前者は高学歴ほど、後者は人口密度の高い都市ほど威信差が小さくなる、すなわち同類結合が促進されることを示す。とりわけ後者は、フィッシャーをはじめとする「都市化が個人の選択の余地を拡大し、その結果同類結合が促進される」という議論と結びつくのかどうか（Fischer 1982, 大谷1995）、その内実についてより詳細な検討が必要になる。

5. 結 語

本調査は都市間比較を主目的として実施されたものであるが、職業的地位は対象都市を徹底する個人属性としてネットワークとの関連を示すことが明らかとなった。その際に、職業的地位を構成

する従業形態と威信地位とは、いくつかの異なるネットワーク特性と結びつく。ネットワーク・サイズについて、従業形態は近隣ネットワーク量・習い事友人数（女性）に影響し、ともに自営・無職女性において発達していた。威信地位は近隣ネットワーク量・遠距離友人数・学校友人数に影響し、近隣は低地位において、後二者は高地位において発達していた。また、ネットワークの質的側面として着目した職業的同類結合について、従業形態・威信地位のどちらの側面から見た場合も、概ね自分と同類の相手と結びつく傾向が確認されたが、それを規定する外的要因は従業形態や職種によって異なっていた。

本稿における分析によって、職業的地位から見たネットワーク特性の概要を把握することはできた。では、これらはいかなる帰結をもたらすのであろうか。ネットワークが個人の関係資源としてどのように活用されるのか、同類結合が人々の意識や行動にどう影響するのか。これらについては、今後のさらなる研究が必要となろう。

注

- 1) 前田・目黒（1990）は、やや意識的に「自営を含む」ブルーカラー／ホワイトカラー、「自営を除く」ブルーカラー／ホワイトカラー、さらに自営／非自営といったように、いくつかの分類を試行しながら親族ネットワークとの関連を見ている。本稿における分析の視点は、これを拡張したものと捉えることができる。
- 2) 先行研究では「威信地位」ではなく「職種」が用いられており、この点については必ずしも一致してはいない。しかし、野沢（1992）に代表されるように、通常ホワイトカラー／ブルーカラーといった分類には保有資源による序列が含まれていると考え、連続的尺度としての威信地位を採用した。また、職業的地位の構成要素としては他にも企業規模や役職があるが（富永 1979）、それを用いた分析は別稿に譲ることとしたい。
- 3) 「専門職Ⅰ」は、大学教授・医師・弁護士などの高度専門職、「専門職Ⅱ」は高校以下の教員・看護婦・栄養士などの一般専門職、「専門職Ⅲ」は著述家・宗教家・カメラマンなどの文化的専門職をそれぞれ指す。スコアの算出に関して、基本的には

1975年SSM調査において得られた職業小分類毎のスコア(富永 1979巻末)の平均値を、各カテゴリーに対して割り当てたが、次のような留意点がある。

1. 「農業」のうち、「漁船の船長(57.3)」は外れ値として除外して平均値を算出。
2. 「保安職」のうち、実際に調査されているのは「警官(54.2)」と「守衛(32.4)」のみなので、原票に当たって判断し、全ケース(N=8)による平均値を割り当てた。
3. 「専門職Ⅰ」のうち、「研究者(62.7)」「獣医(61.3)」などは他のスコアからの類推のため、原票に当たって判断し、全ケース(N=23)による平均値を割り当てた。
4. 「管理職」のうち、「国会議員(81.1)」は外れ値として除外して平均値を算出。
- 4) 友人以外の親しい人(親戚/職場・仕事関係/近所)の人数はカテゴリーで質問されているので、分析においては各カテゴリーの中央値をとって、「いない」=0/「1~3人」=2/「4~6人」=5/「7~9人」=8/「10人以上」=10という量的変数とした。
- 5) 「現住都市」は人口密度を指標として、「地域移動」は15歳時の居住地が現住地と同一市区であるか否かというダミー変数として変数化した。なお、従業形態と威信地位を独立変数として同時に投入する際には、威信スコアが付与されていない無職者は分析対象外とした。
- 6) 「自営」には自営業主・家族従業員・自由業・経営者(役員)が含まれるが、特に近隣ネットワークが多いのは前二者であった。
- 7) 遠距離友人数(対数値)を従属変数とした重回帰分析によって確認した。
- 8) 学校友人数(対数値)を従属変数とし、威信スコアおよびこれらコントロール変数を独立変数とした重回帰分析によって確認した。なお、対象者の「学歴」は、最終学歴を教育年数に換算した数値を用いた。「地域移動」は現住市区に流入したのが学卒後か、それ以前か(非移動含む)による。
- 9) これは、名義的次元においては集団内交際が優越し、等級的次元においては位置の相違がより小さい相手との交際がより頻繁であるというブラウの議論に基づく(Blau 1977)。
- 10) カイ自乗検定によるといずれも $p < .01$ で有意であった。ただ、男性パートの場合はケース数が少ないので、ここでの突出したオッズ比を額面通りには受け取り難い。なお、同類結合の分析に関し

ては、この他にログリニア・モデルによるレベル・パラメーターの検定が挙げられる(Marsden 1988, 鹿又 1990)。

- 11) カテゴリー変数に関してはカイ自乗検定、量的変数に関してはt検定を行った結果である。
- 12) 「最も親しい人」の威信地位について、質問票では「専門職」が1つのカテゴリーにまとめられているため、冒頭で設定した職業威信スコアをそのまま付与することはできない。そこで、調査対象者の学歴とその威信スコアとの関連をそのまま適用することによって、その近似値とする。具体的には、現職が専門職である調査対象者の威信スコアの平均値を学歴別に見ると、医学部・大学院修了者のスコアのみが突出していることから、医学部・大学院修了者の専門=75.8、その他の学歴の専門=59.9というスコアを割り当てた。なお、この分析においては、対象者本人の職業との関連も検討するので、対象者の威信スコアについても同様の措置を取る。参考までに、職種10カテゴリーに対して付与した威信スコアと、この方法によるスコアとの相関は $r = .986$ と極めて高い値を示した。

参考文献

- 大谷信介『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房, 1995.
- 鹿又伸夫「交際と社会的距離」, 平松闊編『社会ネットワーク』福村出版, p.89-111, 1990.
- 富永健一「社会階層と社会移動へのアプローチ」, 富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会, p.3-29, 1979.
- 野沢慎司「インナーエリアとコミュニティの変容」, 高橋勇悦編『大都市社会のリラクチャリング』日本評論社, p.125-152, 1992.
- 野辺政雄「コミュニティ・クエスト ―キャンペラにおける検証―」, 『社会学評論』42巻2号, p.110-126, 1991.
- 前田信彦・目黒依子「都市家族のソーシャル・ネットワーク・パターン ―社会階層間の比較分析―」, 『家族社会学研究』2号, p.81-93, 1990.
- 松本康「アーバニズムと社会的ネットワーク ―名古屋調査による「下位文化」理論の検証―」, 『名古屋大学文学部研究論集』哲学38号, p.161-185, 1992.
- 松本康「都市度、居住移動と社会的ネットワーク」, 『総合都市研究』52号, p.43-77, 1994.
- Axelrod, Morris, "Urban Structure and Social

- Participation”, *A.S.R.* vol.21(no.1), pp.13-18, 1956. (鈴木広訳「都市構造と集団参加」, 鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房, p.211-221, 1965.)
- Blau, Peter M., *Inequality and Heterogeneity*, Free Press, 1977.
- Fischer, Claude S., *To Dwell among Friends : Personal Networks in Town and City*, The Univ. of Chicago Press, 1982.
- Laumann, Edward O., *Prestige and Association in an Urban Community*, The Bobbs-Merrill Company, 1966.
- Marsden, Peter V., “Homogeneity in Confiding Relations”, *Social Networks* vol.10, pp.57-76, 1988.
- Verbrugge, Lois M., “The Structure of Adult Friendship Choices”, *Social Forces* vol. 52 (no.2), pp.577-597, 1977.
- Wellman, Barry, “The Community Question : The Intimate Networks of East Yorkers”, *A.J.S.* vol.84(no.5), pp.1201-1231, 1979.

Key Words (キー・ワード)

Personal Networks (パーソナルネットワーク), **Occupational Status** (職業的地位), **Homophily** (同類結合)

Occupational Differences on Personal Networks

Takuya Hayashi*

*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No.64, 1997, pp.25-38

This paper examines the association between individual's occupational status and his/her personal network. The occupational status is operationalized by two indices: employment status and occupational prestige. It was found that the employment status is related to the number of close neighbors and to the number of friends through common activities especially for female subjects. Prestige status, on the other hand, is associated with the number of close neighbors, long distance friends, and friends from school. The higher the subject's status, the smaller the size of network of neighbors, and the larger the size of friend network. There is a tendency of choosing others of similar occupational status as close friends. The factors relating to this phenomenon will be discussed.